

PHD LETTER

72

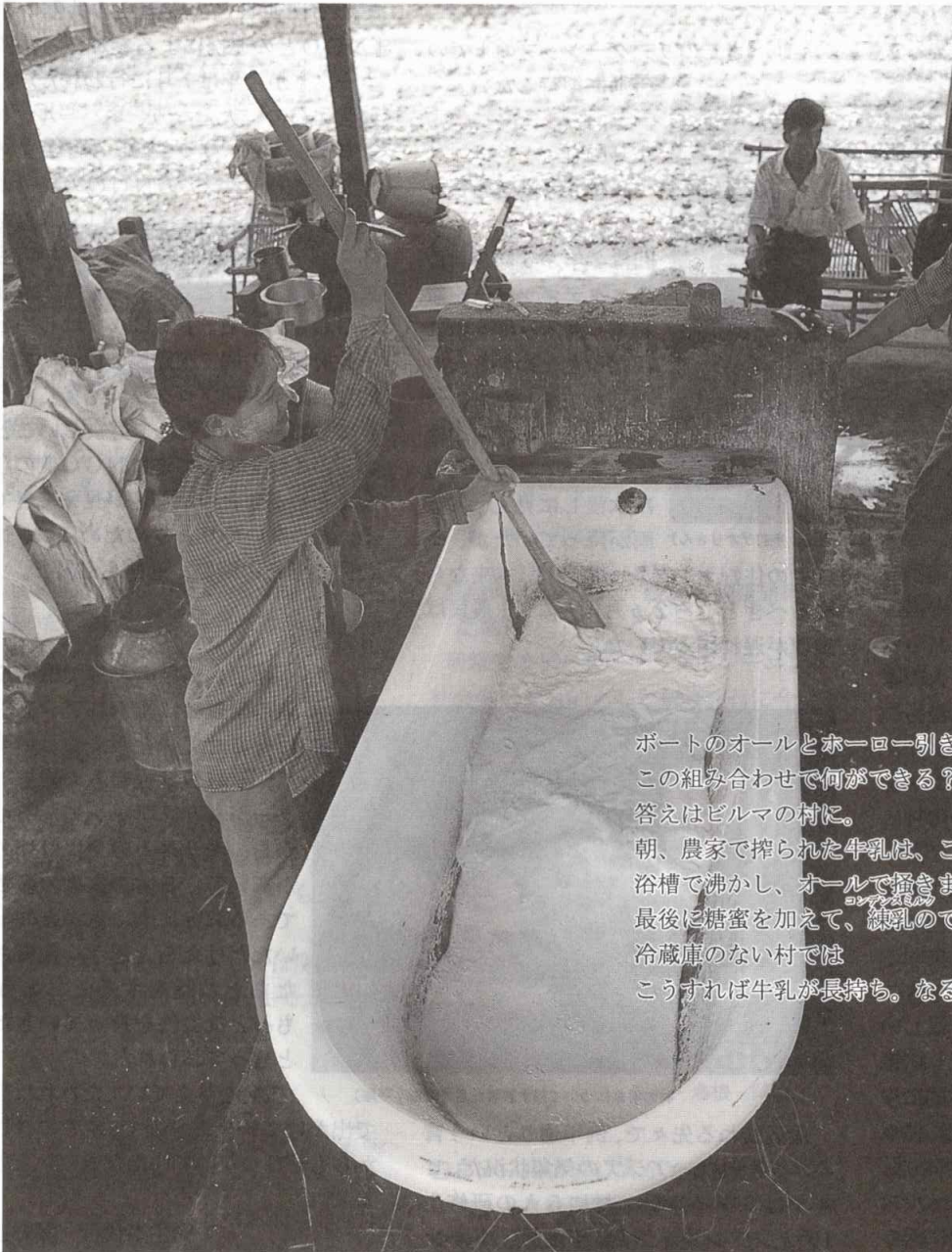
1999・9

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
e-mail：phd@po.hyogo-iic.ne.jp
定価：100円

- ナマズ・トンボとの共生も「ビルマツアー報告」……… 3P
- ボディープローのように……… 6P
- 50年の努力の一部を担う……… 7P



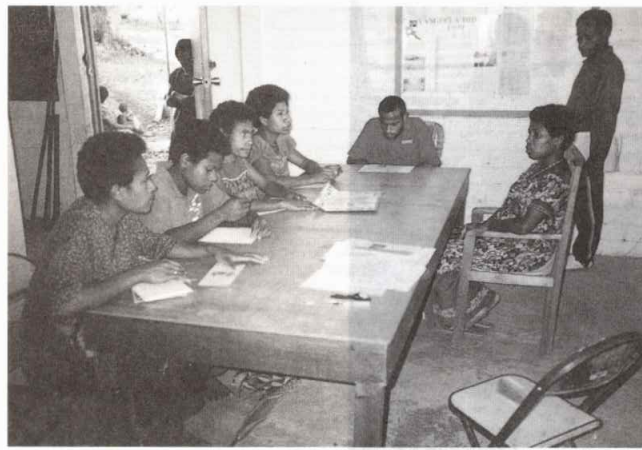
ポートのオールとホーロー引きの浴槽、そして牛乳。
この組み合わせで何ができる？
答えはビルマの村に。
朝、農家で搾られた牛乳は、ここに運ばれ
浴槽で沸かし、オールで掻きまぜ、
最後に糖蜜を加えて、練乳のできあがり。
冷蔵庫のない村では
こうすれば牛乳が長持ち。なるほど。

ビルマ マンダレー近郊 撮影：FUJINO.T

東西南北 問題解決 取組日記

6月×日

去年の訪問の時すでに雨季に入っていて、移動に苦労したこともあって、今回は早目にパプア・ニューギニア(PNG)に出かける。99年度やってくる予定だったアキガオさんに代わって、2000年度を迎える研修生の選考を行う。PNGからはルーテル教会開発奉仕部(LDS)を窓口研修生を選んできたが、その対象地域のモロベ州フィンチャーフェンから女



次期研修生選考風景(右奥ハリエオさん、手前ゲオリさん)

性4人、男性1人が候補者として集まってきた。ヘルペさん(90年度男)、帰国間もないゲオリさん(98年度女)も立ち合い、個別の面接の後、有力候補3人の家庭訪問を行った。今回の候補者は優劣つけがなかったため、ヘルペさん、ゲオリさんたちとも相談し、地域のバランスを考え、ハリエオさん(97年度男)の隣村に住むリンダさん(女性)に決定した。

フィンチャーフェンという地域に絞りで、招いてきているが、この地域は広く、研修生同士が日常的に行き来することはなかなかできない。そして地区に一人だけでは、その活動の展開も難しいといったこれまでの経験から、新しい地域への広がりより少なくとも日常的にやりとりできる範囲に2人を配置し、拠点づくりを強化する方向で話をすすめた。これにより、この地域の中心地ヘルスバックにヘルペさんを置き、内陸に入ったブノンゲン村、マワネン村にワニさん(97年度男)とゲオリさん、海岸線を北へ上ったワリンガイ村、ワンドカイ村にレルさん(90年度男)、ラニーさん(91年度

女)そして今回の選考でハリエオさん、リンダさんがワレオ村からということになった。この地域はヤングペラ・ディディマンという名のLDSの農業研修コースがあり、研修生の多くはその受講者であり、その運営にヘルペさんがあ

たっている。ヘルペさんのリーダーシップの下での活動に期待したい。

7月0日

昨年6月以来のビルマ(ミャンマー)へ。今回は2年ぶりに3回目のスタディツアーを兼ねて。夏休み早々の日程だったためか8人の小じんまりしたツアーとなった。到着前の機上からのヤンゴン周辺は水浸しに見え、毎日雨が降っていたが、研修生の住むマンダレー周辺は、本来なら降るべきところ2ヵ月雨がなく、農民は田植が遅れ困っていた。



村の将来について話す者たち(撮影:平尾)

最近訪ねる先々で、例年通りという言葉がきかれないアジアの気象状況だ。ビルマはタダインシェ村に5人の研修生(ティンアンウィン92年度男、トゥンティン93年度男、ムーム93年度女、トゥントゥン94年度男、カインソー96年度女)が固まっており、他の地域にない日常的なやりとりやグループとしての

活動がある。このまともは、ただPHDの研修生というだけでなく、地域に以前からある生活向上のためのプログラムのメンバーであることが大きい。これは活動推進のための強味である。ところが、その中に実は2つの動きがあり、片方が金や物の支援が前面にでていることもあって対立があるようだ。村づくりは単に技術の移転だけではなく、人をつないで、動かしていくものであり、その難しさを今回強く感じた。

7月△日

昨年に引き続き、国際協力事業団(JICA)大阪国際センターとPHD協会も加わっている関西NGO協議会の共催の事業『NGOとの連携による参加型村落開発コース』が今年7月に行われた。私も運営委員の一人となり、ネパール、バングラデシュ、スリランカ、タイ、フィリピン、インドネシアのNGOのワーカーの兵庫県内農家見学を担当し、13人を市島町の一色さん、橋本さん、神戸市西農協の本野さんのところに案内した。最近NGOと外務省、JICAをはじめとする政府側との間で国際協力について定期的な会議や共同プログラムも多くなってきている。それはそれで好ましいことであるがこれを通じて逆にNGO側の意見をまとめることの難しさが見えてきている。質の高いやりとりのためには、NGO間の意見の調整、勉強も必要だ。

8月□日

最近、仏教のお寺で檀家や住職の研修会に招かれアジアのお話をさせていただくことが続いた。PHDは提唱者の岩村ドクターがクリスチャンであることから、キリスト教会には知名度が高いが、日本の宗教の多数派であるお寺にも、もっと知っていただけたらと思う。住職さんたちとお話をすると、お寺ももっと社会性を持っていきたいと言っておられた。

機会を与えていただければ喜んで出かけていきますので、読者の皆さんからもぜひつないでいただきたいと思

総主事代行 藤野達也

◆◆ ナマズ、トンボとの共生も ◆◆

～第3回ビルマフォローアップ&スタディツアー報告～

7月21日～29日の日程で、5人の研修生のいるタダインシェ村を8人で訪ねました。その後でヤンゴンではNGO訪問をしたり遺跡のまちバガンに村人と一緒に出かけたりと、盛りだくさん。

“暑い”ビルマを体験してきました。

*参加者のレポートを抜粋でお届けします。

ビルマへきて日本の子供たちとの違いがよくわかった。勉強でも、すごくまじめで、楽しそうだった。

後藤正秀(名古屋市・小学生)



村での「国際交流会」は聴衆500人!!(撮影:増本)

タダインシェ村の年齢期に相当する子ども数は300名で、そのうち160名が小学校に通っている。これは全国平均の2倍に当たり、都市部ではない貧しい農村におけるこのような就学率は驚異的といえ、5名の研修生の行動の大きさを推測できる。

日本のように、学校に行けることが当たり前のように思いその有難さが分からず、みんなが行くからという理由で学習意欲のない者も含め大半が高校へ進学するというのも大きな問題であるが、様々な事柄を考える上で必要な最低限の知識すら持てない子が50%もいるこの国の実態を考えると、暗たんたる思いがする。インドネシアの前大統領スハルトの功罪の「功」の部分の上げるのは難しいが、1つだけ言えることは、大半の子が小学校教育を受けられるようにしたことであろう。

(中略)

PHDと研修生として受け入れた人々との間に、単なる技術指導を越えた心と心の絆がしっかりと出来ていると肌で感じた。PHDの活動が一過性のもではなく、研修生を中心として将来にわたって引き継がれていく可能性の大なる活動だという印象を強く持った。

後藤光夫(名古屋市・中学教員)

ビルマは、現在大学が閉鎖されている。これは、政府が大学生が運動を起

したりするのを恐れているからである。ただこのことが、ビルマにとっても大きな財産を失っていることになる。

増本一朗(明石市・大学生)

まず、一番に思ったことは「生きているんだなあ」ということでした。食べる・寝る・働く、毎日のように... このあたりまえのことが私にはうらやましく思えた。村の女性達は私に「生きる」ことをもう一度深い意味で思い出させてくれたような気がします。

前川真弓(横浜市・会社員)



ムームさんの勤める保育園で村のことを話す

その村には、水道も無く、ガスも無く、車も無かった。舗装のされていない道が続き、竹で編んだ家が並んでいるばかりだった。

しかし、その村には人々の絶え間無い「笑顔」と、限りない「優しさ」があった。そして、その村で私は、その「笑顔」に触れ、その「優しさ」に包まれた。私の中の何かははじけた。

日本の暮らしの中での、私の「忘れ物」。「笑顔」と、「優しさ」、そして、素直に「ありがとう」と思う心。村の人達から学んだたくさんの人間として最も大切な、基本的な事。現代社会に生きる私達の「忘れ物」。その事を、次の世代へと伝えていきたいと、強く思う。

前川優子(篠山市・自営業)

トゥンティンさんは日本で学んだ有機農業を村に広めている。化学肥料、農薬による弊害を村人に説き、自ら乳牛を多頭飼育し、耕作牛からも堆肥を生産しほ場に還元している。村には200頭の乳牛が飼養されており、稲わら堆肥は水田、果樹園、



畑地に還元され、収量増に大きく貢献している。若いグループも結成され化学肥料に頼らない村人の健康を守る持続的な農業が広がりつつある。機械化されていない牛糞堆肥の散布は大変な作業である。牛車を改良した散布作業を見学したが、汗と埃に塗れて土づくりに若い情熱をぶつける姿に感動した。化学肥料を投入したほ場では土壌の硬化で牛の力では深く耕すことが出来ないという。そのため稲の根は大きく張らずいろいろな生育障害が出ることに村の人達も気がついてきた。

又、農薬の使用が水田の生態系を破壊してきた事にも気がついている。農家の人達が昔に比べて稲の病気が増えたと言ひ、農薬を多用する事により水田の動物、昆虫相が貧弱になったと結び付けていることで明らかである。彼らは蛙、亀、ナマズ、トンボとの共生がいかに大切であるかを肌で感じとっている。

山に木が無くなった事が、異常気象の原因であるとも言う。トゥンティンさん達の若いグループの活動が、一步一步であるが、村の農業を本来の姿に戻しつつあり、PHD協会が「草の根の研修生」を受け入れて行う日本での研修の成果が着実に活かされていることを今回のスタディツアーで改めて実感した。

平尾栄治(神戸市・県職員)



村での農作業はみんなで一緒に(撮影:平尾)

研 修 生 レ ポ ー ト

17期生

ペリポーさんが6月末に来日し、17期生4人が揃いました。それぞれの研修現場で頑張っています。

エディーさん

フィリピン

藤井誠次氏(神戸市)～一色作郎氏(兵庫県市島町)～中野宗嗣氏(春日町)～渋谷雅弥氏(神戸市)～草の根生活塾(篠山市)～橋本慎司氏(市島町)



野菜作りを学ぶエディーさん

エディーさんは、現在46歳です。そのため、日本語を覚えられるのか、全く違う環境での生活に適応していけるのか、心配をしていましたが、今のところ予想外に頑張っています。

エディーさんは、昨年の5月まで送り出し団体であるサフルディのスタッフとして、村の人に有機農業をすすめる仕事をしていました。そのため、有機農業の方法、技術についての知識は十分に持っています。エディーさんは、「机の上や本で有機農業の勉強をするのだったら、もう十分にできたので、必要はなかったかもしれないけど、実際に実践している農家へ行ってみると今まで知らなかった技術、工夫があり、それぞれの農家で自分で経験して覚えられるので良かった」と話しています。

6月には、昨年11月のエディーさんの選考時にフィリピンを訪ねて下さった一色さん宅での研修に出かけました。一色さんは、「アジアの村に共通して言えることだが、エディーさんの村の問題は、畜産と畑が結びついていないことだ」とおっしゃいます。「動物を飼い、糞を取り、堆肥を作って、それを畑に入れて野菜を作る。そして、畑で

できる野菜クズや雑草を動物に食べてもらう。この結びつきが大切。日本の研修では、色々な動物を組み入れた経営を見て、フィリピンでは、どの動物を経営に入れることができるかをよく考えるとよい」とのアドバイスを受けてきました。

これを受けて、7、8月と兵庫県内を中心に研修を続けてきましたが、エディーさんは、特に、春日町の中野さん宅で牛の尿を利用していただけが印象に残っているようです。トウモロコシに尿を散布したところ、3、4日でみるみる葉の色が青々としてきたのを見て驚きました。今まで糞を有効利用して堆肥を作ることは考えてきたけれど、尿まで利用するのは驚いたそうです。研修生の村で尿を集めるためには、牛小屋の床がセメントでなければならないため難しいのですが、エディーさんの豚小屋の床はセメントなので、あそこで牛を飼ったら尿も集められると計画しています。これから帰国までに、いくつかこんな計画(エディーさんはアイデアと呼んでいます)を作れるかなと考えているようです。

ポーディさん

タイ



子どもの発達段階について保健婦さんから話をきく

太陽保育園、和田山保健所/岸政次郎氏、今倉清氏(兵庫県八鹿町)～篠山市保健センター、篠山デイサービスセンター、ささやま保育園/山岸輝雄氏、岩下富子氏(篠山市)～国際交流の会とよなか、清水せつ子氏、福井れいこ氏、波部佳世子氏、高丸恵子氏、鬼丸久代氏、米虫衣江氏/野村和子氏、波部光稀氏(大阪府豊中市)～高砂市健康課、高砂保健所/児島一裕氏、神

吉道子氏(兵庫県高砂市)～鴻谷美江子氏(神戸市)～草の根生活塾(篠山市)～尾崎食品株式会社(神戸市)

ポーディさんは、明るく、活発でどこでも人気者です。おしゃべりも大好きで、今のところ日本語も一番上手に話しています。保健衛生と手芸が主な研修のテーマですが、学んだことをどんな風に村に帰って伝えていくことができるのか、どうしたら村の人達に喜んでもらえるのかを考えながら、どんなことにも興味を持ち、積極的に学んでいます。

まず、保健衛生、栄養等についての研修を中心にスタートしました。ポーディさんの出身地域はきれいな水が入るようになり、手を洗う、身の回りを清潔にすること、また、栄養の基本的なことは、多くの人が理解するようになってきました。また、診療所も近くにあり、困ったときは気軽に相談できるようです。そうすると、研修生が、帰ってからすぐに取り組める問題、比較的簡単にできる改善の工夫などを日本で研修の中から見つけるのは難しくなってきます。ポーディさんは「村には本当の保健婦さんもいます。私は何が出来るのかよくわからない」と言いながら、一生懸命学んでいます。

その中で、離乳食の実習を見たことが、参考になったようです。「村のお母さんは、離乳食まで栄養のことを考えて作っていないと思う。柔らかいおかゆだけをあげているから、野菜や魚を柔らかく調理する離乳食は、村のお母さんに教えてあげたらいいですね」と話しています。

ポーディさんの出身地域では、米の裏作として大豆を作っています。今は、町からくる商人の付けた値段で売ることができないので、村の人の収入は安定しません。そこで、この大豆を自分たちの手で少しでも加工して、安定した値段で売ることができないかと、以前の研修生であるプリチャーさんは考えています。そこでポーディさんに、豆腐づくりを研修させて欲しいというリクエストがあり、8月、神戸市の尾崎食品で研修しました。ポーディさんは何度も自分で作ってみて、一通り豆腐やおからを使ってお菓子の作り方を覚え、これを

帰ってから、実際にどうしたら作って売ることができるのか、材料のながりの入手方法、また販売の方法等、これから更にプリチャーさんとも連絡を取り検討していくことが必要です。また、ポーディさんは、この地域の布を織る女性のグループの推薦も受けて来日しています。このグループの布は今のところ多くは布のまま販売していますが、加工して売ることができるよう、手芸の研修をしています。自分の家族のために作るのと違い、販売するためには細かいところまできちんと作ることはもちろんですが、買う人の好みに合わせた「売れるもの」を考えなくてはなりません。「カレンらしさ」を大切にしながら「売れるもの」という難しい注文に研修生も指導して下さい先生方も頭を悩ませながら研修をすすめています。

帰ってから、実際にどうしたら作って売ることができるのか、材料のながりの入手方法、また販売の方法等、これから更にプリチャーさんとも連絡を取り検討していくことが必要です。

また、ポーディさんは、この地域の布を織る女性のグループの推薦も受けて来日しています。このグループの布は今のところ多くは布のまま販売していますが、加工して売ることができるよう、手芸の研修をしています。自分の家族のために作るのと違い、販売するためには細かいところまできちんと作ることはもちろんですが、買う人の好みに合わせた「売れるもの」を考えなくてはなりません。「カレンらしさ」を大切にしながら「売れるもの」という難しい注文に研修生も指導して下さい先生方も頭を悩ませながら研修をすすめています。

ペリポーさん

タイ



毎日事務所で日本語の復習

神戸YMCA学院専門学校(神戸市)～草の根生活塾(篠山市)～柴原幸代氏、波賀みどり保育園/田中五郎氏、山村雄彦氏、井原宏枝氏(兵庫県波賀町)

他の3人から2ヵ月遅れて6月23日に来日し、一人で日本語研修をすることになりました。先に日本語研修を済ませた3人の研修生からは「先生につきっきりで教えてもらえるなんていいなあ」とうらやましがられましたが、一人きりで勉強するのはペリポーさんにとってはそれほど簡単なことではありませんでした。途中何度か「もう帰りたい」と言って、日本語の先生にも心配をかけましたが、少しずつ日本の生活

にも慣れて、落ち着いて勉強し、8月7日に無事日本語研修を終えました。

最初の研修は波賀町へ出かけました。波賀町での滞在、研修の調整を引き受けて下さる田中さんは、毎年タイへのスタディツアーに参加していてペリポーさんの村にも滞在したこともあります。まず、初めは、リラックスして研修をスタートすることができました。

ダスウィルさん

インドネシア

広岡史郎氏(兵庫県福崎町)～渋谷喜男氏(神戸市)～牛尾武博氏(市川町)～原田富生氏(大阪府能勢町)～草の根生活塾(兵庫県篠山市)～西川則孝氏(愛媛県丹原町)

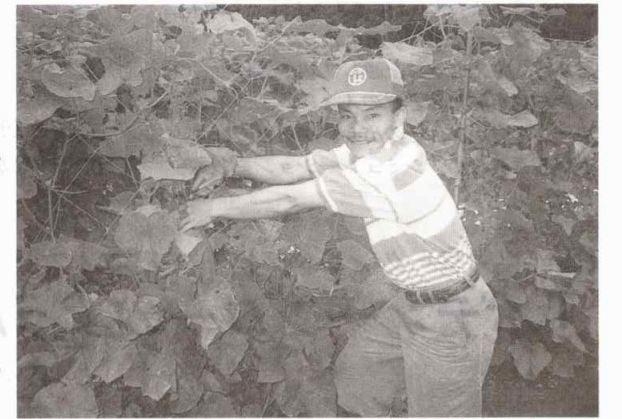
タベ村から初めての研修生であるダスウィルさんは、日本で見ることも、聞くことが全て新鮮で、楽しくて仕方がない様子です。

タベ村は主食の米と現金収入になるサトウキビを多く作っています。今のところ、作物に時折病気が発生したりする問題もあるようですが、何か問題があったら収穫が少なかったり、現金が必要な場合はサトウキビから作る黒砂糖や籐細工を作ったり、町へ大工の出稼ぎに行くので、それ程危機感はないようです。そのため、何を学んで帰るといいのか、研修の目的が明確になりにくいようです。

けれども、話を聞いていると、タベ村では利用していない(捨ててしまっている)ワラ、草、モミガラなどを日本では堆肥を作ったり、マルチ(雑草が生えないように野菜の根元に敷くこと)に使うなどして、有効利用していること、同じ畑に同じ作物ばかりを植えるのではなく、トマトの次は豆というようにローテーションさせていく輪作等、色々村ではしていないことを見ているようです。日本での研修と村での生活につながりが見えてくるのはもう少し先になりそうですが、ゆっくり見守りたいと思います。

ダスウィルさんが研修の中で一番好きな

のは収穫の作業です。「帰ったらこんな大きなトマトを作りたい。こんな甘いトマトを作れたらいいなあ」等と考えながらするからだそうです。



「収穫は楽しいです」

ホストファミリー紹介

柴田克彦さん 寿賀子さん

(神戸市)

ペリポーさんと同じムシキー村から94年に短期生として来日したプリチャーさんに続いて、ホストファミリーを引き受けてくださいました。最初の1週間は、娘さんの川窪さんのお宅にもお世話になりました。来日当初、ホームシックにかかったペリポーさんを励ましなが、優しく見守って下さっています。

最初の研修に出かけるペリポーさんを「初めから全部覚えようと思ったらしんどくなってしまいうから、半分忘れても大丈夫よ」と送り出して下さいました。



ペリポーさんと

国際協力ワークショップを今年も5月から6月にかけて全4回で行ないました。今年で4年になりますが、その間、多くの方が参加し、出会い、いろんな発見や気づきがありました。

国際協力というけれど、それはなんなの、誰がするの。海外での出来事やその人たちの生活が、自分にも関わがあると、知識で知るだけでなく、感じて、行動を起こしていこう——それを促すためのワークショップです。

内容を少し紹介すると・・・

第1回：協力、コミュニケーション

紙片を組み合わせて『正方形をつくる』という作業を通して、協力とはどういうことかを考えました。『伝達する』ことの難しさを知るワークを行いました。

第2回：異文化体験を通して知る価値観

参加者が観光客と村の人という二つのグループに分かれ、その出会いからどんなコトが起こるのか、シミュレーションをしました。

【国際協力ワークショップ】

「ボディーブローのように・・・」

内側からみて見ると・・・

第3回：食糧を通して、南北問題や構造について考える

チョコレートの価格がどのように構成されているのかを、5つの立場に分かれて討議しました。また、金持ちと貧しい人がサンドイッチを取り合うという寸劇から、話し合いました。

第4回：自分の感じたことを大切に。気づいたことからはじめよう。

——それぞれの振り返りから。

このワークショップのねらいは、皆さんの「参加」からの気づきです。体験し実感することからおのづと気づき、変えられていく——いくつかの手法を用いてテーマに迫ります。

進行には、前年の参加者にも仕掛ける側（ボランティアスタッフ）に入ってもらい、組み立てていきました。その準備も、もうひとつのワークショップになりました。

この準備を進めるなかで担当の私が実感したことは、日々の活動のなかで研修生に対して伝えていることが、どんなことかです。

既にあるものをもう一度バラバラにして考え直し、新しい見方を取り入れる、

そのための柔軟な頭を持つことがいかに大切か。

作り上げることの難しさ、だからこそある楽しさ、分かち合える楽しさ——各スタッフも感じていると思うし、それぞれの思いもあるでしょう。

その声をいくつか拾ってみると・・・

石川照子

(96年参加の高校教員。97年ツアー参加)

初めのうちは自分の生活と関係なかったがこのワークショップに関わりだして4年経って、やっとなり肉となってきたと実感。子どもたちと関わる中で、大人たちが与えることより、危なっかしくても自分たちで課題を乗り越えていけるようにサポートしていくことが大切と感じる今日この頃。

久保雅一 (98年参加)

仕掛けながら、実は自分も仕掛けられ

ものは嬉しい」で止まってしまう。なんでこんなに安いのかと、そのワケを考えてみることをしてこなかったのではないのでしょうか。

今回は、自分たちのしたこと、感じたことを振り返りシートに記入してもらいました。直後の気持ち・感じていることをそのままにせず、さらに深めていくことが出来るのでは…との思いからです。また、最終回にはそれを元に、さらに皆で話し合うことで、「自分たち」を知ることができたと思います。

尾下葉子 (98年参加。現在小学校教員)

初めは教材集めのつもりで参加したが、収穫は「変わったのは自分」ということだった。「自分」という人間はどういう人間か、傾向、新たな自分を発見できた。



事務所

るというのがこのワークショップ。

食糧・サンドイッチを使つての寸劇をPHDの活動との接点で捉えると、足りないものをその場で与えることよりもなぜ困っているのか、その原因を見つける、その解決を支援していくことが大切と感じた。それをもっとワークショップの中に取り入れていけたら、PHDのメッセージがもっとよく伝わると思う。ここの活動はボディーブロー（腹部へのパンチ）のようなもの——じわじわと効いていく。

中山佳昭 (98年参加。大学生。ツアーも参加)

一年、二年とワークショップに参加し続けるうちに、一歩引いて見ることができ、このねらいがわかってきた。自分が何も知らない、知らなさすぎる、だからここで聞くことに納得、納得、納得。一年越しで振り返れたのかな。

今まで与えられたものに疑問を持たない、自分に返して考えることをしてきていないことの多い私たち。それは、問題点が見えないということ。例えば、「安い

国際協力っていうけれど、まずは自分を磨かないといけない。いろいろなことが国際協力につながっているから、かかわり方もいろいろあっていい。

石川透 (97年参加。会社員)

今回、自分の生活や関わっての体験、思いを語れたこと、参加者と共有できたのは収穫。「子どもと一緒にできるワークショップ作り」が夢。

さて、今後に向けて、手法に終始しないように、そこから引き出されることは何か、参加者の実感がわくような仕組みをもっと考えなければ、という反省もありました。

自分の生活や日常の出来事と世界、アジアを「なぜ」でつなぐと、それはいろんな行動、活動になっていくと思います。

皆さんも、PHDを使ってください。ひとつ、ふたつとつきあっていくうちに、じわじわと効いてくる、と思いますよ。

(小松 みち)

50年の努力の一部を担う ～林業体験合宿「枝打」(下草刈り) 報告～

今年も第9期林業体験合宿「枝打」(7.3～7.4、兵庫県篠山市大山地区)を(財)大山振興会、兵庫県篠山林業事務所などの協力を得て開催しました。

このプログラムは実際の林業体験や、林業事務所の方による学習会を通して、日本の林業の現状や研修生の国の森林問題について考える機会を持つものです。

3日の昼はあいにくの雨の中、山に入つての森林観察、夜には学習会を行いました。4日は朝から大山地区の下草刈りへの参加です。ここ何年かは1993年に植林した同じ斜面で草刈りをしていました。

森林観察では、20年育てた杉の木が一本たったの200円、50年育てて杉を切れば経営できたのも、今では安価な輸入外材に押されて、80年待たねば採算が取

れないというお話に、日本林業経営の現状と、アジア・南太平洋地域などでの森林伐採の関係が見えてきます。

学習会では、林業事務所の南都さんが「現在、森林や山に興味を持つ人は増えていると思います。しかし、そうした人でも自分の子どもが『林業を仕事に選びたい』と言った時、親としてそれを『頑張れ』と言えるかどうかは別と考えているのではないのでしょうか。それを『頑張れ』と言えるような、山を守るという大事な仕事をしている人たちがもっと評価される社会にしたいですね」とおっしゃっていたのが印象的でした。

下草刈りは、曇りで涼しいという好条件の下、参加者も余裕たっぷり。斜面に自生している木イチゴを味見するなど例年に比べて元気一杯です。

作業後の感想会では「続けて同じ斜

面に来ていると、年ごとに木々の成長や、植生の変化が良くわかる。継続することの重要性を知りました、「気がついたら杉の木に『大きくなれよ』と心の中で言いながら作業していた」などの感想が飛び出し、林業についてより親しみを持ってもらえたと思います。

秋の「枝打」(11月13日～14日開催予定)では、枝打、間伐作業体験とともに、フィリピンからの研修生エディーさんに参加してもらい、エディーさんを中心に彼の出身地域や、森林の様子についても話を聞く予定です。

日本だけでなく、アジア・南太平洋地域の森林伐採、林業、日本との関係について皆さんと考えてみたいと思っています。興味のある方はお問合わせ下さい。

○月×日のPHD協会

職員 山西 夏の行事、草の根生活塾の事前合宿、本番とフル参加。宿舎のトイレが満杯で、思いもよらない肥え汲み作業も。プログラムの多様さに感動。

職員 伊藤 低金利のご時世。多くの利息収入を、でもリスクは最少にと、銀行、証券会社の担当者と日々やりとり。NGOの仕事にはこんなにも。

職員 藤野 この夏3つのスタディツアーでビルマ、インドネシア、スリランカへ。較べて一番暑いのは冷房をあまり入れないPHD事務所。出掛けずとも熱帯。

職員 谷 20歳年上のエディーさんを迎えに研修先の農家へ。出てきたお子の「エディーさん、お母さんが迎えにきたよー」との一言に爆笑。確かに役割はそう。

職員 小松 元職員柳下さんの結婚式に出席。お相手は事務所出入りのボランティア。当時の職員が久しぶりに顔を揃え、同窓会のおもむき。私は9年目現役。

職員 田中 スマトラのあぜ道ですべて転んで右手のひらに血豆を作る。つぶすと、手で食べる食事の時、唐辛子がしみるので、つぶさぬよう慎重に。

(名前のあいうえお順)

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

1999年	5月	47件	1,214,787円
	6月	325件	2,369,299円
	7月	502件	3,440,867円
		874件	7,024,953円

以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

□今年もありますNGO大学

13期目を迎える国際理解・国際協力入門講座「NGO大学」(関西NGO協議会主催)が今年も9月25・26日から毎月1回の予定で開催されます。今年も当協会藤野が校長をつとめます。

詳しくはPHD協会もしくは関西NGO協議会(06-6377-5144)まで。

□暮れの定番タイ・ツアー

コンピューターの2000年問題で実施時期が微妙ですが、暮れにタイツアーを予定しています。詳しくはお問合わせ下さい。

タイ北部 チェンマイ県・メーホンソン県
日程：99年12月23日～31日(予定)
参加費：19万円 定員：13人

□73号・74号は増ページ!!

いつも、8ページが定番のPHDの会報。でも、少しでも多くの情報をお伝えしたいと今年は後半増ページをすることになりました。この機会にみなさんからのいろいろなご意見をもらいたいと思っています。こんな記事が読みたい等のご意見、また、寄稿なども歓迎です。詳しくは、お問合わせ下さい。

□東日本研修旅行、西日本研修旅行のご案内

研修生のリーダーシップトレーニング、社会学習を目的とした研修旅行に今年も出かけます。各地で交流会を予定していますので、近隣の方には、また、ご案内をお送りします。

・東日本

日程：11月中旬～下旬
予定コース：福井・愛知・岐阜・長野・山梨・東京・神奈川

・西日本

日程：1月中旬～下旬
予定コース：鹿児島・熊本・大分・福岡・山口・広島・島根・岡山

□Eメールアドレスができました!!

やっとなりPHD協会もEメールアドレスを取得しましたので、お知らせします。ご活用下さい。

e-mail/phd@po.hyogo-iic.ne.jp



編集後記

春のワークショップでPHDを知って、はや3年。大学生に戻って、少しは時間の余裕が出来て、今年は草の根生活塾に参加できました。

鶏をさばくのを手伝ったり、草木染めや農作業、わら細工など、初めての経験もあり、とても楽しめました。

ただ楽しさと共に、いろんな思いや疑問が浮かんできました。200年前に建てられた民家に泊まって、有機栽培のトマトやキュウリを食べていたら、それだけで変に満ち足りた思いになるんです。「本当の豊かさとは何だろう？」と考えさせられました。風の音や川の音を聞いたのもひさしぶりでした。そんな自然の中に住んでいると、何故か時間も都会より、ユツタリ流れて、心も優しくなれる気がします。昔、人が自然にもっと近かった時、人間の欲望も少なかったかもしれないと感じました。

それに対して「自分の日々の生活はどうだ

ろう」「沢山のモノに囲まれて、美味しい食事、便利な生活をしているが、本当に満ち足りているのか」。

アジアから来た研修生と一緒にいて村の生活を教えてもらって、今の自分の生活を見直すキッカケになりました。そして、見えないところで、彼らの生活と自分たちの生活も結びついているんだと気づきました。自分たちの身の回りから、他の国の人の生活を知る事から、相互理解、国際協力が始まると思います。

M. K.

編集メンバー：井上由美江、春日正男、土本丘、中山佳昭、西馬弘子、飛田教子、増本一朗

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。